

平成 21 年 6 月 24 日現在

研究種目：若手研究(B)
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18720247
 研究課題名（和文） アメリカ先住民社会におけるナショナリズムとジェンダーについての文化人類学的研究
 研究課題名（英文） Cultural Anthropological Research on Nationalism and Gender in a Native American Society
 研究代表者
 谷本 和子 (TANIMOTO KAZUKO)
 関西外国語大学・国際言語学部・教授
 研究者番号：40269816

研究成果の概要：エスニック・マイノリティが民族的ナショナリズムを形成するプロセスにおいて、ミス・コンテストが果たした役割について研究を行った。ナヴァホ社会におけるミス・コンテストは、美人コンテストとして始められたが、間もなく容姿に代表される「女性美」は審査項目から外され、ナヴァホの民族性を代表する知性と教養、伝統文化への知識を兼ね備えた若い女性が「文化的指導者」として選ばれるようになった。ミス・コンテストは伝統文化を復興させる装置として機能し、民族的ナショナリズムを形成する上で重要な役割を果たしてきたのである。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,800,000	180,000	2,980,000

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：文化人類学・文化人類学/民俗学

キーワード：ナヴァホ、ジェンダー、アメリカ先住民、ミス・コンテスト、ナショナリズム、文化人類学、経済開発、文化復興運動

1. 研究開始当初の背景

(1) 米国におけるナヴァホの女性をめぐる文化人類学的研究には、母系社会の中心的存在として親族に強大な影響力をもつ年輩の女性や、家畜の所有者として経済的に強い立場にたつ女性についての研究が最も多かった。1980年代以降は、家畜の屠殺政

策(1930年代)によって引き起こされた女性の地位の低下と、近代化による主流社会的な性別役割分業の浸透を検証する研究が中心となっている。これらの研究のほとんどは、伝統的な生活を送るナヴァホ女性を対象としており、ドメスティックな領域における性別役割分業の研究に重点を置いている反面、近代的な社会において公的な領

域で活躍するナヴァホ女性たちについてはほとんど取り上げていない。また、研究者の多くがアングロ系の男性であり、ステレオタイプのナヴァホ女性観を、それがステレオタイプであるという自覚もなく説明に用い、男女関係の相補的・調和的な側面を強調する一方で、性による利害の対立や権力関係への視点を欠落しがちな傾向が認められる。

(2) ミス・コンテストは共同体において共有される「シンボル」や「実践」において、「エスニシティ」と「女らしさ」を明確に定義するものである。つまり共同体のアイデンティティ形成において、ミスに選ばれた女性は、ジェンダー化されたナショナリスト的表象といえよう。そのような観点からミス・コンテストを考察すると、単なる美人コンテスト以上の民族誌学的重要性が見いだされる。

しかし、ナショナリズムの研究は、戦争や「男らしさ」、男性の女性や少数者に対する優位性の枠組みで語られることが一般的となっている。本研究がテーマとするジェンダーとナショナリズムの形成、共同体のアイデンティティ形成という観点にたつ研究は、まだほとんど行われていない。

以上より、ミス・コンテストの多重的な機能に着目する研究、およびジェンダー理論を援用したナショナリズム形成についての研究を行う必要性を強く感じた。また、そのような観点からの研究は、ミスコン批判と「ミスコン批判」に対する批判が主流となっている日本のミス・コンテスト研究に、新たな理論的枠組みを提示できる可能性があると思われる。

2. 研究の目的

(1) エスニック・マイノリティが民族的ナショナリズムを形成するプロセスにおいてミス・コンテストが果たした役割について照準をあてつつ、システムティックな研究をすることによってナショナリズムとジェンダーについての文化人類学的研究を行うこと。

(2) ナヴァホ社会におけるジェンダーについての研究を、外国人女性研究者が実施することによって、アングロ系男性研究者を中心とする従来の研究とは違う新たな視点からとらえなおすこと。

(3) ナショナリズムの研究を、戦争や「男

らしさ」、男性の女性や少数者に対する優位性の枠組みで語るのではなく、女性というジェンダーに視点を置いて、ジェンダーとナショナリズムの形成、共同体のアイデンティティ形成という観点にたつ研究を行うこと。

3. 研究の方法

(1) 海外現地調査：アメリカ合衆国南部に位置するナヴァホ・インディアン居留地にて現地調査によるデータ収集を行った。

1980年代から1990年代末にかけて開催されたミス・コンテストについての調査を実施。当時の写真・映像資料や新聞などのメディアにおける情報を収集した。

1990年代末にかけてミス・ナヴァホ・ネイションに選ばれた女性たちを個別に訪問し、彼女たちへのインタビューを中心に20世紀後半に求められた民族を代表する「理想的」な女性像についてのデータを収集した。

2006年度と2007年度のミス・コンテストの様子を写真およびビデオに撮影し、映像記録データとして収集するとともに、コンテストに関係した人々へのインタビューを実施した。

調査を実施するにあたり、ナヴァホ・ネイションの政府機関(Navajo Nation Historic Preservation Department)より研究計画についての審査を受け調査の許可を得た。正式な許可を受けたことで、ミス・ナヴァホ事務所(Office of Miss Navajo Nation)やテレビ局(Navajo Nation TV5)、地元住民から予想以上の協力を得ることができ、特に映像データやインフォーマント選定において、大きな成果をあげることができた。

インフォーマントには本調査が正当な目的のための調査であることを十分に説明した。インタビューを行うにあたり、研究の目的、および対象者の人権と利益の保護への説明を行い、同意を得られた場合にだけコンセント・フォームに署名してもらい実施した。収集したデータは、研究者が責任をもってセキュリティ・キャビネットにおいて管理し、データベース化した後は棄却するものとした。なお、データベースは人物を個人名ではなくコード化した連番で示し、セキュリティ・ロックしたシステムに保存している。

(2) 理論・事例研究

近代社会におけるジェンダーポリティクス、ナショナリズム、エスニシティ、女性美をめぐる身体性などについての理論や事例を、日米両国の研究成果を中心に研究した。

4. 研究成果

(1) 米国南西砂漠地帯に位置するナヴァホ・ネイションは、米国最大規模の先住民族人口を誇り、言語や宗教をはじめとする伝統文化を継承しながら近代化をとげた社会である。ナヴァホ社会では1950年代よりインディアン局が中心となって社会経済開発が進められた。鉱物資源開発によって雇用が促進され、道路や上下水道が整備されていき、英語による学校教育が徹底された結果、1970年代には都市部において英語話者が一般的となり、アングロ系主流社会の文化的価値観が伝統的文化観を圧倒するほどになった。そのような「白人の文化」に対抗し、民族独自の文化的価値観を守るために伝統文化を全面に押し出した行事が奨励されていたのである。そのような行事の中で、最も注目を集めたのがミス・コンテストであった。

(2) ナヴァホ社会におけるミス・コンテストでは、自分たちの民族性を代表する知性と教養、伝統文化への知識、そして近代文化をよく理解し、目的意識をもって社会問題に取り組む「指導者」として経験を積んだ女性が「理想的」な女性像として選ばれる。女性の身体とパフォーマンスを通して、共同体のモラルやその地域独自の歴史・文化観が提示され、エスニシティが強化されてきたのである。そのようなプロセスの中で、女性の「容姿」は重要な審査項目ではなくなり、ナヴァホ社会におけるミス・コンテストは主流社会でみられるような「西洋的」女性美が披露される場ではなくなった。

(3) 近年、伝統文化への理解と実践が厳しく審査されるようになり、91年に羊の屠殺・解体という高度な伝統技術の実践がミス・コンテストの審査項目に導入された。羊の屠殺・解体は伝統技術であるが、主流社会への同化が進んだ現在、日常的に実践できる若者はごく少数にとどまる。ナヴァホは文化社会的に影響のあるイベントに羊の屠殺・解体を導入することによって、若者層における伝統技術やナヴァホ語、そして羊をめぐる伝統文化の活性化と復興をねらったのである。

(4) ミス・コンテストは共同体において共

有される「シンボル」や「実践」において、「女らしさ」と「エスニシティ」を明確に定義するものである。しかし、ナヴァホ社会におけるミス・コンテストの選考過程においては、女性美に代表される「容姿」は問われなくなった。その一方で、指導者としての人間性と社会的活動への取り組みが審査され、羊の屠殺・解体に代表される高度な伝統技術の実践が要求されるのである。近年の伝統文化復興運動の活性化の影響を受けて、ミス・コンテストはナヴァホの民族性の高いイベントとして再定義され、民族的ナショナリズムを強化していく機能をになうことになったのである。

以上より、ナヴァホ社会におけるミス・コンテストでは、「女らしさ」というジェンダー役割にとらわれないナショナリスト的表象が提示されているといえよう。その一方で、共同体のアイデンティティ形成において、ミス・コンテストは伝統文化を復興させる装置として機能するとともに、ナヴァホが民族的ナショナリズムを形成する上で重要な役割を果たしてきたのである。今後の課題として、本研究の成果をミス・コンテストの多重的な機能に着目した研究につなげていきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

谷本和子、「ヒツジがつなぐ伝統と近代：世界で一番タフなミス・コンテスト」『季刊民族学』第30巻4号(118号)財団法人千里文化財団、pp. 56-61、2006年、査読無

〔図書〕(計1件)

岸上伸啓(編)阿部珠理、谷本和子、(他7名)『北アメリカ先住民の社会経済開発』明石書店 2008年 総307頁(pp.69-102)

〔その他〕(計1件)

シンポジウム

谷本和子「ナヴァホ社会における経済開発の諸相：クリーン・エネルギーと観光開発は持続可能な発展をもたらすのか」国立民族学博物館主催・ミニ・シンポジウム『北アメリカ先住民の開発』平成18年6月24日に講演、25日に総合討論。国立民族学博物館。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

谷本 和子(TANIMOTO KAZUKO)

関西外国語大学・国際言語学部・x教授
研究者番号：40269816